

学級創造活動 4年白組

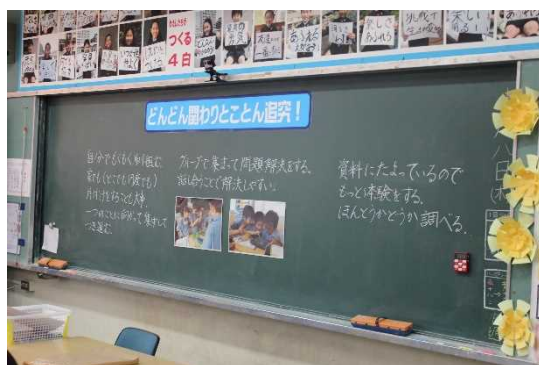
活動名「どんどん関わり とことん追究しよう」

支援者 石井 都 先生

一人一人が、自分の課題に没頭しつつも、困っている友達には一緒になって考えようとする素晴らしい姿が見られました。それも、石井先生が一人一人の特性を見抜き、支援をしていたからだと考えます。

【子どもの活動】

- 1 これまでの関わり方について振り返る。
- 2 伝えたい相手は誰なのか、伝えたい内容は何かという視点をもって活動を進めていく。
- 3 必要に応じて自然発生的交流を行い、改善のための視点を見付ける。
- 4 改善点など見付けたよさはもちろんのこと、自分や友達の学び方、関わり方のよさも書き留めておく。
- 5 振り返りを行う。



前時までに、振り返りの視点が共有されている



これまでの関わり方について振り返る



友達の課題に寄り添う



個人で追究活動に取り組む



個人で追究活動に取り組む。



全体で振り返りをする

【石井先生コメント】

「問い」について改めて深く考える機会となった。

子どもの中で問いが生み出されていく過程を教師はどう見取り支援するか。子ども自らが生み出した問いをどのように捉えるか。発達に応じた適切な問いづくりにより、主体的に追究できる活動にしたい。

石井実践 【 第4学年 学級創造 】

～どんどん関わり とことん追究しよう～



本実践の主張点

子どもが自己や集団にとって意味のある価値を創造する

見方・考え方を育むために

提案Ⅰ 個人追究に向かう方策及び主体的かつ継続的に追究し続けるための方策を探る。

提案Ⅱ 自分にとって意味のある価値を認識し、身に付いた力を実感できる支援と評価の在り方を探る。

個人追究に向かう方策及び主体的かつ継続的に追究するための方策について

◆学級創造活動の時間の具体的な運用について子どもと共有する

今年度、学級創造活動の提案も多く、議論が深まっているところである。その中で、学級創造活動の運用の仕方について、具体的な提案がある。石井提案では、「個人追究の時間」「人のために費やす時間を大切にする活動」「身の回りの問題を解決する活動」「学校行事などに関わる活動」に分類し、子どもとその時間の中身を共有している。特に、学校での過ごし方や学校行事に関わる場所について話し合う時間が保障されているところも大切なポイントである。また、25分と45分との時間の使い方についても共通理解されている。このようにすることで、子どもが見通しをもって活動に取り組むことができ、子どもが中心となって活動を運営することができるようになる。

◆個人追究における問題解決の「問い」のつくり方

個人追究を継続していくためには、問いをもつことが大切である。そこで、石井提案では、低学年では、身の回りの興味あるものから、中学年では、興味・関心のあるものや達成感のあるものへ、更に高学年では、自分にとって役に立つという有用性の視点をもつことと発達段階に合わせて、どのような問いをもてばよいのか提案されている。やはり、身の回りからだんだん関わる対象を広げていくことと追究していく中身の充実度によって、より洗練された問いがつけられていくのではないだろうか？

また、西野真由美先生からのご指導の中にあつたように、子どもの問いを追究していくのに値するものにしていくことが教師として大きな役割と言えるだろう。つまり、**教師は、個々で追究している中で、一人一人の問いに着目し、一緒になって問いを吟味していきながら、子どもに問いをつくる力を育てていくことが大切である。**また一体一の対応では、効率が悪い。だからこそ、**近くの子どもやテーマが似ている子どもなどを巻き込んでいくことも大切である。**

◆主体的な追究を継続的に行うために

個人追究を継続して行うことができるようにするためには、前述したように問いを自らつくり出していくことが大切である。石井提案では、追究する視点を変える子ども同士の交流の必要性も述べられている。更には、テーマ設定のところで述べられている、**同学年内での差異に着目し、個々の発達の道筋に合わせ支援することの必要性も**述べられている。学級創造活動の趣旨から考えると、一律にある一定のところまで高めていこうという教科学習のような考え方ではなく、一人一人の発達段階に目を向け、今その子に必要と考えられる力を付けるように支援していくという関わり方が必要となってくる。

個のエピソードから価値を生み出す対話を取り入れることについて

◆質的転換点を意識した支援と評価を工夫する

山森先生が「人との関わりは十分に見られるが、ものとの関わりが弱いのでは？」という質問をされた。それに対して、石井先生は、「教科学習で育まれた見方・考え方の姿が創造活動で見えてくる。だからこそ、見直したのは自分の教科学習の在り方である」と答えられた。2領域のつながり、つまりはカリキュラム全体で子どもを育てていくことの重要性を語っている答弁であった。そのようにつながりを意識している石井先生だからこそ、創造活動においても、教師は質的転換点を意識して、子どもの姿を見て取り、支援していくことの大切さを主張されたのだと考える。**今後、個々の発達の段階が違う子どもたちを、育てたい見方・考え方の指標を用いてどのように支援していくのかを検討していく必要がある。**

◆子どもの発達に合わせて評価の仕方を工夫して設定する

資料を写している子どもの姿をどのように評価するのか？ということが議論となった。その中で、石井先生から**写すことから始めて、写しながら自分のものにしていき、自分の世界が変わるところまでを目指すべき**であるということが述べられた。石井先生は、子どもの学びの道筋を具体的に想定しているからこそ、個々の子どもに合わせた支援をすることができるのである。追究する中身が違っていても、一人一人のその時の姿をしっかりと捉え、さらに伸ばしていくために、どのような関わり方をするのかについて議論していきたい。

成果と課題

- 学級創造活動の時間の運用の仕方を明確にし、子どもと共有することで、子どもが主体的に活動に取り組むことができる。
- 個々の発達の段階を捉え、個々に合わせて支援し、評価することで価値を創造することができる子どもを育てることができる。
- △ 子どもが個人追究をできるようになるために、問いを子どもがもつことができるように支援の在り方を検討していく必要がある。